

「人は女として生まれるのではない、女になるのだ」と言ったのはシモーヌ・ド・ボーヴォワール。「人は教育によって作られる」ということを言ったのは、ジャン＝ジャック・ルソーとカント。すなわち「人は人間として生まれるのではなく、教育をして人間になるのだ」そして教育とは学識を詰め込むことではなく、それを入れる器— 知ることと考える力— を用意して、そこに知識を盛り付けることだ。世の流れに則する高学歴で暗記的知識をたくさん持っているながら、それを応用できない人は多い。他方、自分の好奇心でたくさんの知識を吸収しながら、それを応用できる人がいる。考えたら日本人の英会話力というのは「知識の詰め込みを重視して応用力を育てない」教育の現れではないだろうか。道具はそれに見合う使い方をしなければ役に立たない。

ところで近頃、キャロライン・ケネディ駐日米大使の着任でケネディ家に注目が集まったが、11月22日はジョン・F・ケネディ元大統領暗殺から50年目だったそうだ。その墓碑には就任演説の一節である名文が刻まれているという。「ask not what your country can do for you —ask what you can do your country (国が諸君に何をし得るかではなく、諸君が国に何を与えられるかを問おう)」まさに今の日本に問いたい言葉である。「国民の意に添う」のは正しい事であるが、国民のあらぬ要求にまでも応じているから、真面目に生きている者が圧迫されるのである。

ここで10月に聴講した小森陽一氏（日本文学者）と高山宏氏（英文学者）のターナーに関する対談を回顧する。絵画に関する内容はともかく、お二人の会話の中から私が拾ったものは生き方だった。小森氏は高度な人間を求めて、高山氏は高度な知識を求めて人生を進んできたように思う。互いの行き着く先は「純度の高いもの」である。そう思うのは、他に私が出会った人たちの中で、純度の高いものを求めて深い知識を身に付けてきた人は、人間的にも優れていたからだ。他人を圧迫することなく、他人を認めることを知っている。それは自分が認められようとするれば、他人も認めなければならないということを手伝ってきたからであろう。長所を認めるということは短所も受け入れるということである。それが人間を認める人間同士の付き合いだ。傷つくことを恐れ、それに抵抗しようとする者たちは、自分で傷を癒すことを知らず、他人が傷を治してくれるのを当たり前だと思っている。長所だけを受け入れて短所を拒否する。自分の楽のために国が何かをしてくれるのを待っている。人から与えられる金メッキに一喜一憂するばかりで、自分で発掘して磨く純金の光りを愛でる喜びを知らない。それは型通りを善とし、個性の発揮を抑えてきた教育のひずみかもしれない。

そのような人間未満を奨励する社会で犯罪は増加し、「ここまで規制するか」という新規則が生まれる。絶対服従によって人情の正当防衛が成り立たず、がんじがらめでまたキレる人がいたり、それをすり抜ける悪い手段を講じる人が出る。しかしそれでも人間が滅亡しないのは「人間らしい人間」になろうとする人々がいるからだ。だから歌が生まれる。詩が出来る。画が出来る。それらの表現を通して人々の心に美しいもの呼び起こす。それは芸術家の使命という規制からではない。純度の高い希求から生まれるのだ。芸術は幸せを満喫した状態や生活に追われる必死の中からは生まれない。芸術は「男と女を尊重して人間になろうとする人間」の悩みと苦しみの中から生まれる。だから癒したり力づけたりして人々の心を惹きつけるのだ。(2013.11.23)